

---

# 隙間の文明

土方一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>



## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

隙間の文明

### 【Nコード】

N8748Z

### 【作者名】

土方一

### 【あらすじ】

かんがえちゅうんー



## 1日目 選定

「間もなく選定が開始されます」

ああ…今日も始まった

「…コスギユウヤ…東京都千代田区…」

テレビから聞こえて来る無機質な人の名前を読み上げる声、この中に自分の名が無いことを確認するのが俺の…いや、この国の国民の日課だ

とは言っても1日5人から10人しか呼ばれない、皆自分は呼ばれることは無いと当然の様に思ってる

半年ほど前から始まったこの放送、名前を呼ばれるとどうなるかは誰も知らない

始めは名前を呼ばれるとどうなるのか皆気にしていたが徐々に話題に登らなくなった

まあ知り合いが呼ばれたと言う話は誰からも聞いたことないし自分が関わることもないだろう…

そういえばごく近所の住所が呼ばれた時はちょっとびびったな…

うちは近所付き合いが盛んな割には全然知らない名前だったけど

「…イケダ マモル…」



……俺の名前！？

冗談だろ…同姓同名なだけのことを祈りつつ住所を確認したがどうやら俺のこの様だ…

これから何が起るのか不安だかとりあえず会社に向かう

「今日の放送で俺呼ばれちゃったんすよー」  
出社して一番廊下にいた先輩に相談してみた

が、先輩は気づかなかったのかスツと自分の部署へ行ってしまった  
名前を呼ばれてしまった意味はすぐに理解した

誰も俺の話を聞いてくれない…と言うより話しかけることに気づいてくれない  
俺を認識していないのだ

事態に戸惑いつつも俺は自分のデスクへと向かうがあるべき場所に  
俺のデスクが存在していなかった

よくよく見渡してみるとこの慣れ親しんだ部屋に俺に関わりのある  
ものは存在しなくなっていた

気が狂いそうだ…

とりあえず誰も気にすることもないだろうし一旦家で落ち着こう

自分の部屋が見えて来たとき俺は愕然とした…



俺が住んでいた部屋は空き部屋となっていた

それもさも今まで何年も誰も住んでいない様子ようだ

半狂乱になった俺は必死に自分の痕跡を探してみたが何一つ残ってはいなかった

俺の存在が無かったことにされたようだ

誰からも認識されず、存在が抹消され意識のみが残された俺はまるで幽霊のようだ…

絶望にうちひしがれ崩れ落ちるなか俺は一つの事実を思いだした

以前呼ばれた近所の人の名前は数年来の付き合いのある人物であったと言うことを…



## 1日目？ 把握

今まで特別なことをしてきた訳じゃない

善行をしてきた訳じゃないけど悪行を働いた覚えもない…多分…

なぜ俺がこんな目に…

とりあえず状況を整理すると

- ・人から見えていない
- ・今までの生活の痕跡がない
- ・物には触れるからいつの間にか死んでた訳ではない

こんなところだろうか

幽霊というよりは透明人間だな…

「イケダさんですか？」

うなだれてた顔を上げると知らないおっさんが俺の顔を覗いていた

「そうですけど、どちらさ…」

…あれっ？見えてるのか！？俺を？

「いやあ、災難だったねえ」

「俺の事が見えてるんですか？」



「ああ、私も君と同じ境遇だね」

俺だけでは無かったのか…

少しの安堵と共に疑問も浮き出てきた

「何で俺の名前を？」

まあまずはこの辺りだ

「私たちは毎朝の放送をチェックしてできるだけ新入りを迎えに行ってるんだ」

私たち？

「私たちと言うことは他にも？」

「ああ、私のグループは50名程で行動している。…おっと、私の名前はヤスダだ」

「俺たちみたいのが50人も…」

「あの放送が始まって半年は経つんだ名簿に記してるだけでも千人は確認してるよ」

そう言えばそうだ、1日8人だとして180×8で1400人程度いるわけだ…

「俺はどうなってしまったんですかね？」

まあこれが一番気になるな…



「まあ今の状況の通り、普通の人たちからは見えてないし以前の個人情報などは消滅している」

「それ以外の説明の出来る人間は仲間にはいないんだよ…いずれにせよ我々の常識から外れた出来事だ」

そこまで情報をもってるわけじゃないのか…

しかし同じ境遇の人間がいたと言うことは心強いな

「一人でも食うには困らないだろうが身の安全は守れないだろう、我々の所に来るといい」

「危険？何がですか？」

「君はインビジブルと言う映画は観たことあるかい？」

「ありますけど…透明人間が人を襲うやつですよね？ ……！！」

「ああ我々も透明人間のようなものだ」

「仲間がいるから私たちは孤独ではないが仲間ではない人間の中にはモラルを失った奴等もいる」

そうか…こちら側には警察も干渉できないのか…

確かにこの状況を利用しようとする輩もいるだろうな…

「確かに覗きや盗みもし放題ですしね」

俺がそう言つとヤスダさんは少しばつの悪い顔をした

「私たちも向こうの法律を全て守ってる訳ではないんだ…」

「我々が独自に食料などを生産するのは難しいんだ…だから最低限



の必需品は拝借している」

確かに…食料を作るにはそれなりに土地がいる  
管理の行き届いたこの国ではそんなもの確保できないだろうな

「しかしモラルのかけた行動は最低限にして秩序をもった組織を作  
るという考えを持つのが私達のリーダーなんだ」

なんか釈然としないな…

俺たちを認識できない奴等に気を使ってどうなるんだ

「何か釈然としないようだね」

「エッ…」

顔に出てたか…

「まあ私も解るよ、私も始めはそうだった」

「我々はこちら側を隙間の世界と呼ぶのだが、そんな世界にルール  
を作ろうとしているリーダーの考えを聞けば共感出来ることも多い  
だろう」

「…話は聞きましょう、常にあなたたちと行動するかは解りません  
が」

「聞きに来てくれるだけでも良かったよ。 あっ、そうそうリー  
ダーの名前はシジマと言った」

シジマ…そいつがキーパーソンになるのだろうか……







## 1日目？ 軌跡

ヤスダさんたちの本拠地に向かう道すがら俺はこれまでの人生を振り返り替えていた

24年前俺は地方の片田舎で池多 衛>いけだ まもる<として生を受けた

小学生の頃は普通に暮らして中学生の頃は普通に過ごし高校も大学も普通

今の（とはいっても今日までだった）会社に就職し営業をしてたが大した成果もあげていない

彼女もいたが先日別れ……

あれっ？俺って何にも無いな……ヤバい…泣きそうだ…

数時間前に無くした人生を惜しんで振り返ってみたものの、惜しむような経験も無駄になった努力も見当たらないのだ。失ったものにもない…

数時間前になんとなくの喪失感に沈む自分を思い起こすと実に滑稽だな…

まあ俺くらいの歳で何かを成し遂げた奴などそうそういないさ…と、そうでもないことも気づきつつ自分を納得させた

「ヤスダさんていくつなんすか？」



先程の思考を払拭するために話を振ってみました

「いやぁ今年で53になるよ」

「へえーお仕事は？」

「貿易の会社を経営してたんだけど、む……息子にノウハウ叩きこんで早々に経営を任せて隠居してたよ」

「息子さんそんなに俺と年変わんなそうっすね……」

「22になったとこだったね……」

俺より年下で会社任されてたのかよ……ハア……

「着いたよ」

郊外から離れ人気のない山道によくある潰れたラブホテルが本拠地だった

中に入るとちらほらと人を見かけたが中には怪我人もいた……やはり争うこともそれなりに見かけた

シジマの元へ向かう途中高校生位の子供が近寄ってきた

「ようやく帰ってきたかヤスタ」

ハア！？なんだこのガキ目上の人間に対する言葉使いじゃないだろ！？



「そいつが新入りのイケダか？」

俺にもタメ口とは……礼儀教えてやろうか？

「そつだよシジマ君。ほらお互い挨拶しなきゃ」

……こいつがリーダー？



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8748z/>

---

隙間の文明

2011年12月27日20時45分発行